

第14回「日本語大賞」

テーマ 私が^{だいじ}大事にしている言葉

高校生の部 優秀賞 受賞作品

「音にならない言葉」

埼玉県
栄北高等学校
一年 飯塚 柊介

特定非営利活動法人 日本語検定委員会

五指をそろえた手の指先を左胸から右胸に移動させる。この動きは、「大丈夫」の手話表現で、首をかしげて使うと、「大丈夫ですか？」という意味になる。

これは、私が小学六年生で、学校の吹奏楽団体に所属していたときに知った手話表現の一つで、同じ吹奏楽団体に所属していた友人に教わった。なぜ彼が手話を知っているのか。それは、彼が、会話などの大きさの音が聴こえない聴覚障がいを抱えていたからだ。それでも私と彼は、紙に字をかいいたり、大きなジェスチャーをしたりして、よく会話をしていた。

しかし、六年生の最後のコンクール、私達が一緒に演奏できる最後のコンクール、その一ヶ月程前になって、彼の病気は悪化し始めた。今まで聴こえた大きな音が聴こえなくなってきたのだという。当然、みんなで奏でる楽器の音も、である。そうして、ほとんど聴力を失ってしまった彼は、コンクールへの出場は断念することとなった。

そうして迎えたコンクールの朝、会場のすぐ前の広場で集合していた私の元に、彼が駆け寄ってきた。一緒に演奏することはできないけど、観客席から応援するよ。と伝えに来てくれたのだ。私は嬉しかった。だけど、それよりずっと、緊張してしまっていた。最後のコンクールを目前にして、「失敗したらどうしよう。」と、不安に押しつぶされそうだったのだ。そんな私の様子を察してか、彼は少し考えるような仕草の後、そろえた手の指先を、左胸からすうっと右胸に当てて、首をかしげる動きを私にやってみせた。「大丈夫?」。相手を気遣う言葉だ。しかし、その時の私は、この動きの意味を、まだ知らなかった。だけれど私は、私の中にある不安の気持ち、ゆっくりと消えてゆくのを、確かに感じていた。先生の呼ぶ声、私に聞こえ、私は彼に軽く手を振り、会場へと入っていった。

舞台袖。前の学校の演奏が終わり、私達は舞台上に楽器をセットし始めた。チラリと観客席のほうを見やると、大勢の人に見られているのが分かる。また、不安になってきたのだ。どれだけ深呼吸してもなおらず、足も震えてしまいそうになったその時、私は思い出した。彼が私にやってみせた、あの動きを。私は見よう見まねで、指をそろえた手の指先を左胸から右胸に移動させた。「大丈夫」と、心の中で唱えながら。

私は、高校生になってからも、緊張や不安を感じた時などに、この手話表現をするようにしている。理由は、この手話表現には、本来の「大丈夫」という意味の他に、人を勇気づける力を感じるからだ。

古来より日本では、言霊という、言葉に内蔵する力を信じる文化があるが、私が「大丈夫」の手話表現に感じる力は、言霊なのだろうか。もしそうだとしたら、いったい何が言葉の定義なのだろうか。そう思った私は、広辞苑で、その意味を調べた。「ある意味を表すために、口で言ったり字に書いたりするもの。語。言語。」これが言葉の意味だという。なぜか違和感を感じる。そう、「手話」は言葉ではないとされているのだ。自分の気持ちを人に伝え、勇気づけることができる手話が、間違いなく言葉の力を持っているのに、だ。

しかし、それと同時に、私は一つ、嬉しい情報に触れることとなった。それは、世界の手話者数が七千万人以上いるということだ。この数が、一億へと迫り、やがて超す時が来れば、手話が言葉として認められる時が来るかも知れない。聴覚に不自由のある人たちが、そ

うでない人達と、手話を使つて普通に話せる日が来るかもしれない。そんな世界の先駆けに、私が最も大切にしている「大丈夫」の手話があれば、とても嬉しく思う。